世界史アップデート

アステカ

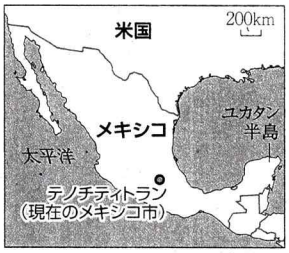
3都市国家の連合

ここに注目！

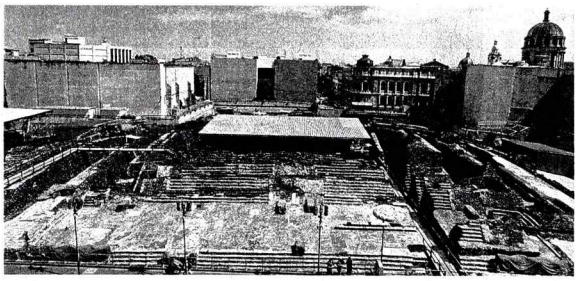
・現在のメキシコで15～16世紀に栄えた「アステカ王国」は、単一の政体ではなく、三つの都市国家の連合で、「アステカ」の名称も後世付けられたものだった。主に征服したスペイン人による記録に基づいて歴史が語られてきた影響が大きい。
・アステカには、いけにえを行っていたイメージが強い。人身犠牲はあったが、動物のいけにえもあり、残酷さが誇張されて伝わった面がある。
・アステカには文字があり、スペイン人による征服後も先住民が多くの文字による記録を残した。近年は、先住民史料に基づいた研究が進み、スペイン人側の視点だけではない歴史の解明が進展している。

15～16世紀に現在のメキシコで栄えた「アステカ王国」について、世界史教科書の記述は簡素だ。ピラミッドのような神殿を築き、絵文字を使い、首都テノチティトラン（現在のメキシコ市）の人口は当時世界最大級だったと考えられることや、1521年にスペイン人征服者コルテスによって滅ぼされたことなどが説明されている。

ただ実際には、「アステカ王国」という単一の政治体制が存在したわけではない。「テノチティトラン」「テツココ」「トラコパン」という、それぞれに王をいただく近隣の三つの都市国家の連合だった。「アステカ」の名称も、18世紀に登場し、19世紀以降普及したもので、当時の人々が名乗ったのではない。



アステカの歴史が、主に征服した側のスペイン人による記録を基に語られてきたことが大きい。井上幸孝・専修大教授（メキシコ史）は「コルテスが侵入した時、3都市の中でテノチティトランが圧倒的に強かったために、一つの王国に見えたのだろう」と語る。当時のメソアメリカ（メキシコ・中央アメリカ北部）では様々な都市国家が興亡し、三つの都市が同盟して政治秩序を作るパターンがよくあったという。



上テノチティトランの中心部の大神殿跡が発見されたテンプロ・マヨール遺跡　下メキシコ国立人類学博物館が所蔵する「太陽の石」は神話に基づく宗教観があったことを伝える＝いずれも井上教授提供

コルテスがアステカを征服した際、先住民都市トラスカラがスペイン人側につき、かつては裏切りのように語られてきた。だが井上教授は、アステカ以前から複数の都市が同盟して政治体制を作る土壌があったことを挙げ、「トラスカラはスペイン人と組んでテノチティトランの覇権を崩し、新たな秩序を作るつもりだったのではないか」と話す。アステカ征服は、コルテス率いるスペイン人がわずか数百人で行ったようにも言われていたが、「反テノチティトランの様々な勢力が合流して叩いたのが実態だろう」という。

●

アステカと言えば「いけにえ」のイメージが強いが、原始的な自然信仰を行い、ひたすら太陽神にいけにえをささげたイメージは、既に否定されている。

人身犠牲が行われてはいたものの、「4日間に8万400人」ものいけにえがささげられたことがあったとも言われてきたことは、明らかに誇張だという。普段の宗教儀礼の中では、動物をいけにえにすることも多く、自身を傷つけて血を流すなど様々な儀礼があったこともわかっている。「神殿の落成式などで国の強さを見せつけるため、意図的に大規模な人身犠牲を行った可能性はあるが、本来の宗教儀礼とは区別して考えるべきだ」と井上教授は話す。

●

アステカは、多くの文字史料を残した。征服前のアステカには文字があり、宗教や暦などについて記録された。征服後の植民地時代には、アルファベットを使うようになった先住民が、文書に記録を残した。その中には、先住民のエリート層が、征服前の先祖の歴史を書き残した文書も多数あった。

そうした先住民史料は、1990年代頃から学術書として刊行が進み、研究環境が整ってきた。井上教授によると、植民地時代の先住民史料には「征服前のエリート層の子孫が自分の先祖を美化したり、植民地支配下で自らの立場を守ろうとしたりして脚色を加えるなどの傾向がある」という。ただ、偏りがあることを念頭に、他の史料と比較するなど注意深く分析することで、スペイン人による記録だけに頼らず、先住民の視点を交えた歴史の研究が、近年大きく進んでいる。

井上教授は、「アステカは非西洋社会で史料が比較的残っている貴重なケースの一つ。研究が積み上がれば、西洋的思考に由来する現代的思考では気づかないような文化や文明のあり方、人々の思考様式を知る突破口の一つになる」と話している。（清岡央）

参考文献　青山和夫編『古代アメリカ文明　マヤ・アステカ・ナスカ・インカの実像』（講談社現代新書）、井上幸孝編著『メソアメリカを知るための58章』（明石書店）、ベルナール・ディーアス・デル・カスティーリョ『メキシコ征服記1～3』（小林一宏訳、岩波書店）

成果を反映し
る予定です。